

「古典」からみた大学改革
——「無用の用」の先へ
藤本夕衣

(日本学術振興会特別研究員 RPD: 慶應義塾大学)

1. 大学改革における人文学の危機

日本の大学では、この20年ほどの間に急速な改革が進められてきた。1991年の大学設置基準の大綱化は、多くの大学において「教養部」の解体を促し、一般教育を軽視する傾向を生んだ。また大綱化は、多様な新学部の設置・再編を加速させた。その結果、「文学部」などの伝統的な学部名を掲げる大学は少なくなり、「国際〇〇学部」や「人間〇〇学部」などを看板にした新たな学部が生まれた。そうした新設学部では、原理論や基礎論よりも、方法論や応用論を中心にカリキュラムが組まれる傾向にあり、理論や歴史など基礎的な事柄について教授する機会は減りつつある。また研究においても、研究費における競争的資金の割合が増え、研究成果を可視化させることが求められている。具体的な成果を明示できない研究については予算が削られる方向にある。

目に見える「有用性」が評価される時代であって、明確な能力の向上がはかれない教育、短期的な成果を示すことのできない研究は「無用」なものともみなされる。

2. 「古典」の意義

このように大学改革の結果、哲学や歴史、文学といった伝統的な「人文学」は危機的な状況におかれている。いったい哲学や歴史、文学の研究やその教育は、現代という時代であって、現代の大学という場において、どのような可能性を持ちうるのだろうか。「有用性」が求められるなかで、あえて「無用の用」の価値を主張することもできる。しかし「無用の用」という言葉で抗う以外に、人文学の今日的な意義を提示することはできないのだろうか。本発表においては、こうした問題関心から、伝統的に人文学が担ってきた「古典」の読解ということの現代的意義を問い直すことを試みたい。

現代の大学論において、古典の意義がかたられることはほとんどなくなっている。一般的に、古典の読解が重視されたのは、いわゆるエリート段階の大学におけることであって、ユニバーサル化した現代の学生は古典に関心を抱いていない、と考えられている。歴史社会学の研究では、大正期の旧制高校を中心に広まった教養主義が、戦後も学生文化の中に残り、学生に古典を読解することの動機付けを与え続けたと考えられている。教養主義は、「人格形成のための読書」を重視し、学生を古典へと向かわせていたのである。しかし、そうした教養主義は、1980年代には没落してしまったとみられている。なぜなら大学の大衆化が進展するに伴って、教養主義を支えたエリート身分文化自体が解体してしまうからである。

しかし教養主義の没落は、エリートからマス、ユニバーサルへと大学が発展したことのみに起因するのではないと考えられる。思想の展開から考えれば、1980年代は、浅田彰の『構造と力』に始まるニューアカデミズムが影響力を持った時代であり、いわゆる「現代思想」が流れ込み、「近代の自律した個人」や「統一された人格」への懐疑が広まったことも、教養主義の没落の一因となっていると考えられる。つまり「読書を通じた人格形成」という教養主義の理念自体が通用しなくなったことが、教養主義の没落に影響していると考えられるのである。

3. 「ポスト・モダン」という枠組み

本発表では、こうした大学の現代的な問題を捉えるにあたって、J=F・リオタールの枠組みを手がかりにする。リオタールの『ポスト・モダンの条件』は、ポスト・モダンに関する代表的な著作として知られているが、実は、これはカナダの大学教育関係の委員会に提出された「知の状況」についての報告書がもとになっている。「大きな物語の失墜」をもって提示された問題領域は、近代の大学の理念の失墜と密接に結びつき、現代の大学がおかれた知の変動を捉えるものとなっているのである。したがって「ポスト・モダン」という概念は、ユニバーサル化やグローバル化といった枠組みとは異なる視座から、「現代の大学」が置かれた問題を捉えることを可能にする。

4. アラン・ブルームとリチャード・ローティの大学論・古典論

リオタールの枠組みを起点に、本発表では、アメリカの政治哲学者A・ブルームとR・ローティの二人の政治哲学者の大学論を参照する。ブルームは、*The Closing of the American Mind*の著者として、主に保守的な立場の大学論を展開した人物として知られている。他方ローティは、ブルームとは反対の左派の論客として、またポストモダニストとして取り上げられることの多い論者である。両者ともに、思想的な立場は全く異なるものの、どちらも政治哲学の立場から、近代の大学の理念が失墜したことをふまえ、「民主主義」の可能性を追求し、「大学」という場のあり方について考察を行っている。そして、その結論として、大学において古典を読むことの現代的意義を提示しているのである。二人の大学論、そして古典論を照らし合わせるなかで、現代社会において、古典を読む場として大学があることの意義を問い返すことを試みたい。